

イラン・イスラーム社会史 —シーア派イスラームの聖地巡礼に関する歴史学的研究を中心に

守川 知子

北海道大学大学院文学研究科 准教授

シーア派の国イラン

西アジアの一角を占めるイランは、イスラーム諸国の中で唯一、シーア派を国教とする国である。預言者ムハンマドの娘ファーティマ(633年没)と、ムハンマドの従弟でありファーティマの夫であったアリー(661年没)からなる一族を重視するシーア派は、13億人を超えるイスラーム全体の中ではわずかに1割を占める少数派に過ぎない。イランはなぜシーア派を採用したのか。イランのシーア派とはどのようなものなのか。このような問題点に端を発し、他とは異なる独自の歴史をもつイラン(ペルシア)世界について、社会史や宗教・文化史的観点から考察することが、筆者の主たる研究課題である。

本稿では、シーア派ムスリムの宗教実践のひとつである「聖地巡礼」について、拙著『シーア派聖地参詣の研究』(京都大学学術出版会、2007年、422+iv頁)をもとに言及しよう。

イスラーム社会の巡礼と参詣

1) メッカ巡礼(ハッジ)と墓廟参詣(ズィヤーラ)

イスラーム社会では、巡礼行為は「ハッジ(巡礼)」と「ズィヤーラ(参詣)」の2つに大別される。「ハッジ」はすべてのムスリムにとって生涯に一度は行うべき義務行為であり、サウジアラビアのメッカにあるカアバ聖殿に決められた時節(イスラーム暦第12月)に決められた作法で巡礼することをいう。

一方「ズィヤーラ」は、聖所や墓に参詣する行為を指し、時節や対象は限定されないものの、アラビア語では両者は厳密に区別される。

2) 墓廟参詣(ズィヤーラ)の歴史と聖者崇敬

墓参詣はシーア派に始まる。彼らは8世紀ごろからイマーム(指導者)たちの墓所(殉教地)への参詣を行い、徐々にそれは同派の法学的根拠をもとに確立され奨励されていった。イマームの墓へ熱心に詣でるシーア派に呼応しつつ、この宗教実践はより普遍的・一般的な墓参詣

としてスンナ派世界へと広まっていった。今日では西アジアや中東のみならず、モロッコや中央アジア、インド、東南アジアなど、世界各地で聖者の墓への参詣(ズィヤーラ)が行われている。

墓廟参詣の対象となるイスラームの「聖者」は神に選ばれ愛された人々であり、生前はその身に神の恩寵を授かり、死後もまた、その肉体や身につけていたものに神の恩寵は宿り続けるとされる。そして聖者は、神に愛されるがゆえに神に近しく、神と一般信徒との「仲介者」として、信徒の願いを神に届ける役目を果たす。聖者の墓は神の恩寵を授かるうとする人々にとって奇跡の起こる場(聖地)となり、多くの信徒が各地の聖墓・聖廟へと足を運ぶ。すなわち、聖者の墓に詣でることには功德(ご利益)があり、聖者に祈願することで、参詣者にとってはその願いが叶うのである。

シーア派の聖地巡礼

シーア派ムスリムにとっても、スンナ派同様、メッカ巡礼が最大の「義務」であり、最重要視されることは言うまでもないが、シーア派の場合は、殉教したイマームの墓廟への参詣こそが重要であり、それはメッカ巡礼にまったく劣らない意義を有する。彼らにとっての「聖者」とは主に、アリーとファーティマの男系直系親族である「歴代イマーム」やその子孫たちである。なかでもアリーの次男で、680年にウマイヤ朝に反旗を翻してイラクで戦死したフサイン(第3代イマーム、680年没)は「殉教者たちの長」としてシーア派の人々の多大な尊崇を集め、父アリーの眠るナジャフとともに、彼の墓所であるカルバラはシーア派最大の聖地となっている。

19世紀のシーア派イマーム廟参詣の実態

筆者は前掲拙著にて、19世紀のシーア派ムスリムのイマーム廟への参詣を扱った。特にイラクにある4ヶ所のシーア派聖地(ナジャフ、カルバラ、カーズィマ



イラン人巡礼キャラバン (19 世紀中葉)



カルバラー (20 世紀初頭)



19 世紀のイラン人の巡礼・参詣諸相

	メッカ・メディナ (アラビア半島)	アタバート (イラク)	マシュハド (イラン)	ゴム (イラン)
テヘランからの距離	2-3 ヶ月	40 日	25 日	3 日
年間巡礼者数	1,000-8,000 人	50,000- 100,000 人	50,000- 100,000 人	?
宗教的義務	全ムスリム	シーア派	12 イマーム・ シーア派	12 イマーム・ シーア派
19 世紀のペルシア語 旅行記数	44 冊	20 冊	16 冊	1 冊

イン、サーマッラー) をめぐることが、当時のイランにおいて空前のブームを引き起こしていたことを手掛かりに、イラン人シーア派ムスリムの聖地巡礼の実態を様々な側面から検討した。

これら 4 ヶ所の聖廟(「アタバート(敷居)」と総称)には、シーア派の中の 12 イマーム派にとって重要な 12 人のイマームのうちの 6 人の墓(および第 12 代イマームの「お隠れ」の場)がある。イラクを支配するオスマン朝との関係が改善した 19 世紀後半には、イランからイラクへ向かう巡礼者の数は年間 10 万人に及んだが、この数字は当時のイランの人口の 1 パーセントにあたり、イラクへの聖地巡礼の人気ぶりが窺える。

拙著ではまず、イマーム廟を参詣すべきシーア派の法的根拠や、巡礼者問題が 16 世紀以降イランの諸政権とオスマン朝の間の重要事項であったことを明らかにした上で、巡礼者たちの旅行記や当時の外交文書をもとに、19 世紀のイラク巡礼の実態を考察した。

1) 旅の諸相

巡礼者は各村落から集団を組み、他地域の巡礼者と合流しながら進んでいく。身分の高い者は馬で、女性は輿

に乗り、そして貧しい者は徒歩で巡礼キャラバンとして移動した。ちなみにイランの首都テヘランから、イラクのバグダードまでは約 1000 キロメートルの距離があり、数百人ときには数千人規模の巡礼者たちは 1 ヶ月強かけてイラクに到達した。彼らの旅行シーズンは、暑くなる夏を避けて秋口にイランを出発し、冬をイラクで過ごすというもので、旅行全体では 3、4 ヶ月から半年、費用もまた社会的身分に応じはするものの、ほぼ半年から 1 年分の俸給に相当する金額を費やしていた。

2) 国境にて

ひと月近く徒歩で歩みを進めてきた巡礼者を待ち受けているのは、国境での通関および検疫である。19 世紀後半には、イラクやメッカ・メディナを擁するオスマン朝は、世界的な衛生問題の対応に追われ、コレラやペストといった伝染病の蔓延を防ぐべく各地に検疫所を設け、旅行者への検疫を義務付けた。史料を見ると、当時の検疫とは、人々を数日間 1 ヶ所に留め置き、問題がなければ数日後に証明書を発行して移動の許可を与える、というものであったことが明らかとなる。このような状況ゆえに、検疫にまつわるトラブルは多発する。検

疫の医師や役人に対する罵詈雑言は際限なく、ときには強行突破する者まで現れる始末であった。ただしその背景には、宗教的高揚心の中、聖地への旅を急ぐ数百人規模の巡礼者たちが、この検疫所で否応なく留め置かれ、料金を徴収されるという現実がある。また、当時の検疫はあくまでも「拡散防止」の観点に基づくものであったため、多数の巡礼者を1ヶ所に閉じ込めるなど、検疫中の巡礼者への対応が相当手荒で侮蔑的であった感は否めない。検疫所は税関も兼ねており、通過の際にはパスポートにあたる身分証が、手数料を徴収した上で発行された。国境を越える巡礼者たちに、国が個々人を管理する「近代化」の一側面と、それに翻弄される人々が見てとれる。

3) イラクの聖地にて

シーア派の巡礼者たちは、巡礼途上の大小の聖所を訪れる。イラクでは、イマーム・フサイン廟をはじめカルバラの戦いで殉教死した人々の墓に参り、南方のナジャフではイマーム・アリー廟に参詣し、そしてバグダード近郊のカーズイマイン廟や、さらにはバグダード北方にあるサーマッラーにも足を運んだ。しかしながら他方、彼らはイラクに多数現存するスンナ派聖者の墓所やユダヤ教徒の聖所はまったく訪れていない。ここに、当時の西アジア世界における宗派意識を読み取ることができ、またシーア派の聖地巡礼という環境にあつては、シーア派の要素のみが個々人の中で強調されていることが確認できる。

シーア派聖地巡礼のもうひとつの特徴は、彼らが参詣という宗教行為にのみ従事していたのではない点である。確かに「巡礼(参詣)」は宗教儀礼であり、道中では質素な食や身なりで旅をし、宗教的情熱は集団行動ゆえにさらなる高まりを見せる。聖地での彼らは日夜墓廟に詣で、熱心に祈る。その一方で、聖地に到着すると巡礼者らは携えてきたものを売り、土産をはじめ様々な現地の産品を買い求め、知人を訪ねたり、名所旧跡や市内の見物・観光、そしてときには売買春など、実に多様な活動に従事している。当時のペルシア語の俗諺に、「参詣も、商売も」というのがあるが、聖俗両面をあわせもっている点は、シーア派聖地巡礼において看過し得ない最も重要な側面である。

このような巡礼者たちの経済活動は、地域への影響もまた大きく、当時のイラク経済は、イランからの巡礼者収入に大きく依存していたことがオスマン語の諸史料から読み取れる。しかしながら、スンナ派オスマン朝支配

下のイラクに多数訪れるイラン人シーア派ムスリムの存在は、イラクの経済を潤す一方、イラクの宗派構成や外国人居住者の比率を著しく押し上げたこともまた事実である。19世紀末のバグダード州政府はシーア派化するイラクについての懸念を頻繁に中央政府に対して表明しており、イラクのシーア派化問題はイラン人巡礼者の増加とともに、このときから争点化されていたのである。

4) その後のシーア派聖地巡礼

20世紀に入ると、自動車等の交通手段の発達や聖地巡礼の経済効果を認識した政府の国内振興策により、イランからイラクへの巡礼は廃れていく。かわりにイランでは国内にある聖地マシュハド(イマーム・レザー廟)の地位が増した。現在ではマシュハドは年間2000万人以上が国内外から訪れるイラン最大の巡礼地となっている。一方イラクのシーア派聖地への巡礼は、2003年のイラク戦争以降、治安の回復とともに再びイラン国内で高まりを見せている。

比較研究への視座

シーア派ムスリムの聖地巡礼から見えてくるものは、何もシーア派イスラーム社会にのみとどまるものではない。

国境を越えるほどの大規模な聖地巡礼としては、スペインの聖ヤコブの墓に詣でるサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼や、日本の四国八十八ヶ所やお伊勢参りが挙げられ、筆者の「シーア派聖地巡礼研究」は研究の進んでいるこれら世界の聖地巡礼と比較検討することが可能である。距離や日数、巡礼形態に限らず、聖地巡礼が聖俗両面をあわせもっている点や、各地にある門前町の「俗な」賑わいもまた、シーア派に限らず、古今東西の世界中の巡礼や聖地の多くに当てはまる特徴である。今後は巡礼の比較史的研究に加えて、巡礼の盛衰が起因する政治との関係や、伝統的なイスラーム社会での「聖地」の特徴に視点を広げて検討していきたい。

今後の研究への展望

翻ってイラン史の文脈で考えた場合、聖地巡礼研究からは、19世紀にはイランの地でシーア派信仰が確固たるものとして根づいていたことが証明されるが、この地がシーア派化するのには16世紀のサファヴィー朝(1501-1736年)の成立以降のことである。サファヴィー朝期は、隣国スンナ派のオスマン朝やシャイバーン朝との敵対関係からシーア派信仰に固執せざるを得ない時代であ

るが、イラン地域がシーア派を受容する背景には、イラン独自の長い歴史があったためと筆者は考えている。

イラン史の特徴は、紀元前4世紀のアレクサンドロスの侵攻や7世紀のアラブ・イスラーム軍の侵入など時代の断絶はあるものの、アケメネス朝（前550-前330年）やサーサーン朝（224-651年）をはじめ、数千年におよぶ長い歴史を有していること、および、イスラーム化したとはいえ、イラン系の人々の母語であるペルシア語が前近代にはイランのみならず、中央アジアや北イン

ド、アナトリア、インド洋世界など周辺諸地域で使用され、イスラーム化以前の伝統を保持しつつ、「ペルシア・イラン文化圏」として、アラブ社会とは一線を画していた点である。

このような歴史的な特徴に鑑みながら、今後は、ペルシア・イランの伝統文化を縦軸とし、イスラームやシーア派を横軸とするイラン史を、時代的にも地域的にも広い範囲を対象とした世界観の中で新たに構築していきたいと考えている。